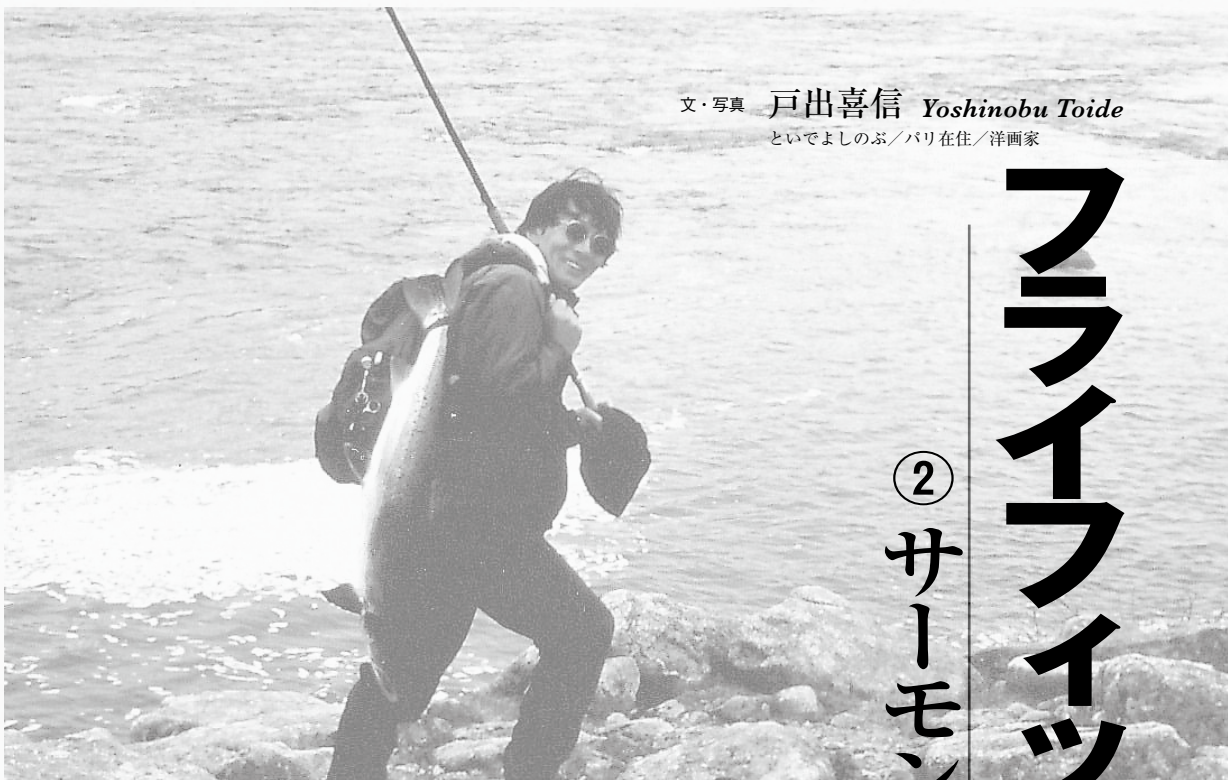


フライフィッシング狂

②サーモンに狂った20年



再びガウラへ

2度目のガウラ川で腕が棒になるほどキャストイングを繰り返しても、ただ空しく日が過ぎていくだけで、期待していたことは何も起こらなかった。

現実はその甘くはなかった。

昨年のあのものすごいサーモンの遡上とジャンプが当たり前だと思っていたのに、今年にはジャンプすらない。

たまに、サーモンを背負って意気揚々とキャンプ場に引き揚げてくるフライフィッシャーマンが「去年は特別だよ。こんな夏を『枯れた夏』と言った。これが本来のガウラだよ。」と言いながらもしっかりと釣ってくるこの人は、北欧の土産店で売っている（木彫りの魔法使い）の化身で、魔法を使つて釣つたに違いない魔法使いのオッサンのように見えた。

意気消沈である。

パイプをふかしながら優雅にキャストイングを繰り返しているフィッシャーのロッドが、突然に変わった。両手に神経が集中した瞬間、口からポトンと落ちたパイプがブカブカと流れていった。

釣り上げたサーモンに震えが止まらず、ひざまずいて何度も何度もキスをしているフィッシャーもいた。

アトランティック・サーモンを釣るって、こんなにエキサイティングなことなのか。

ままならないキャストイングに、「ウチの犬だつて言うことを聞くのに、お前は何で俺の言うことが聞けないのだ。」と、ロッドに向かつて怒鳴っているフィッシャーもいた。

昨年の私と同じだ。

少しぐらいキャストイングがうまくなったからといって、そう簡単に釣れるわけではないということだ。ガウラ川に着いてから早くも2週間がたとうとしていて、私には永遠にこの魚は釣れないかも、と思った。

去年ノルウェーに来る前は、アイルランドへ1週間単位で2年連続通った。何も釣れなかった。スコットランドでは1ヶ月間サーモンリバーを放浪した。この時も釣れなかった。私も釣つてみたい。

もう一度投げろ！

7月も半ばを過ぎると、キャンプ場に空き

地が目立つようになってきた。釣り人が徐々に帰り始めた。

キャンプ場の売店で販売する日釣り券は、キャンプ場脇の2ゾーンは2枚、それより1km下流の4ゾーンは4枚。これらの計6枚は毎日正午に抽選がある。その他のゾーンは朝8時の開店と同時の販売で、実際のあるゾーンに入るには、毛布と椅子を持参して徹夜で並んだものだ。

6枚分の抽選倍率は5、6倍かそれ以上のこともあって、私には当ることがなかったが、この日は10人しかいなかった。ここで外れたら神なんか絶対に信じないと言いながらも、心の内で「神様お願い！」と祈っていたら、私の番号が呼ばれた。「よしっ！」。入りたかった4番ゾーンを当てた。

午前0時のスタートまでひと眠りして、明日は徹夜で頑張ろう。

午前0時少し前の4番ゾーンには、すでに準備を終えて、釣り開始を待っている先客が一人いた。握手して挨拶を交わす。彼もまた、今シーズンはまだ上げていないとのことだ。

白夜のこの季節は、太陽が稜線にかかるころのほんのひとは薄暗くなるが、沈まぬ太陽がまた顔を出すころには、釣り人の数は7人ほどになっていた。抽選組以外はストーリー・フィッシングクラブの連中らしい。

一向に誰のロッドにも変化がないまま、もう10時間が過ぎていた。

体力も限界を越えていて、キャストイング中にも意識が遠のくほどの睡魔が襲ってきていた。

もうろうとしながらロッドを握っている手が、一瞬ぐつと締め込まれた。

「ワッ！」

と奇声を上げてしまった。

それを見ていた誰かが「もう一度投げろ！」と叫んだ。とっさに反応して同じ方向にキャストしたロッドに、衝撃が走った！

あとはもう無我夢中で、どうやって渡り合ったのかほとんど覚えていないぐらいの、その狼狽ぶりが周りにいた連中の語り草になったと思う。

気が付いてみると、足元に白銀に輝く巨体が横たわっていた。

放心状態の中で、みんなの笑顔と、肩や背中をポンポンとたたかれた記憶が残っている。

90cm、7・2kgのサーモンは、アトランティック・サーモンフィッシングとは何であるかを教えてくれた、私にとつて忘れられない1匹だった。

パリで初めての個展

1982年10月、老舗画廊が軒を連ねるマティニオン通りの一角にあるギャラリー・ローランで、パリで初めての個展を開催することができた。

パリで個展をひらくことは私にとつての夢であったが、パリでフライフィッシングに出逢っていなかったら、そんな夢も見なかっただろう。多分2、3年で実家へ帰り家業を継いでいたであろう。

ノルウェーでのフライフィッシングを境に、石にかじりついてでもパリに居座って、絵を描き続けて、ここで生きていきたいと強く願うようになっていた。

機会があることに画廊に絵を見せていたが、体裁よく断られるのが常だった。そんな中で唯一チャンスを与えてくれたのが、ギャラリー・ローランだった。この個展でパリ市が作品を買って上げてくれたのもラッキーだったが、次に繋げる。一歩を踏み出すことができた。

翌年にはふるさと富山で、そして銀座ミキモトでの個展へと続いた。そしてまたギャラリー・ローランでと毎年のように個展を繰り返して、ギャラリー・ギニエ、ギャラリー・フランク・ブルジョワへと個展が繋がって、パリで絵を描き続ける為の足場を懸命に追いかけて続けた。1994年には、縦1m50cm横14m73cmの大作「紫陽花シンフォニー」が完成した。

1995年からは、2年ごとの日本橋三越本店での個展も始まった。学生時代に、別の学部の教授が個展を開催しているというので友達と見に行ったことがある。そこが、日本橋三越本店特選画廊だった。

「いつか、自分もここで個展ができるようになる